

APEX CLUB '95/12

アペックス産業株式会社 創刊号

『APEX CLUB』創刊号
 発行 1995年12月1日(通算第1号)
 発行所 アペックス産業株式会社編集委員会
 〒105 東京都港区芝2-23-4
 電話 03-3455-6474 FAX 03-3455-6558
 発行人 元木 貢 (編集委員) 和田芳武 白坂昭子
 鈴木篤徳 林 純子
 制作協力 株式会社オービット

APEX CLUB会則

(目的) 本会は、アペックス産業株式が持つ情報の提供と会員の相互交流の場を提供することを目的とする。
 (資格) 本会は、アペックス産業株式会社のお得意様、取引先、関係協力先、株主、社員および家族、友人と、本会の主旨に賛同し、積極的にも消極的にも参加を希望する方々によって構成する。
 (事業) 年2回、会誌『APEX CLUB』を発行する他、必要に応じて催事を主催する。

ギャラリー

『第1回フォトコンテスト』最優秀作品発表

昨年3月、新社屋移転を記念して行なった『第1回フォトコンテスト』の入選作品は現在、社屋の階段部分に展示しております。
 『APEX CLUB』創刊を記念して、最優秀作品を1面で、優秀作品を2面でご紹介いたします。



『薫風』

田中 正様

●プロフィール 江戸川文化写真連盟顧問。この道三十数年。二科展に三回入選。得意分野は花や小動物。靴製造業のかたわら江戸川文化写真連盟の会員の指導にあたっておられます。愛用のカメラはマミヤ、オリンパス。手作りの靴、修理をご要望の方は事務局まで。

●作者寸言 風薫る初夏の頃、泡のような卵からクリーム色をした子カマキリが、無数吹き出るように生まれる様は驚異です。夕陽を受けて葉を閉じたニセアカシヤの小枝で目をくりくりさせて動きまわる姿は、何ともあどけなく可愛い。自然破壊の進む今日、小動物達のためにも自然を守る会のみならず一人一人が考えるべきではないでしょうか。

じぶんぐらゐ

ネズミの糞にチュウ意しましょう

世田谷区の中学校で米飯給食にネズミの糞が混入する騒ぎがあった。教育委員会の調べによると、糞の形状や散らばり具合から、糞は配給元の区立用賀調理場で、炊いた米を別の容器に移してかくはんする時に混入したらしい。

同調理場では、ネズミの巣と見られる穴も見つかり、駆除作業を行なったが、依然ネズミがいる形跡があり、しばらく調査を続行。その間はパンや民間業者への委託でしのぐことになった。給食への異物の混入は、全国で二年間に八十九件。ハエや昆虫が見つかった例はあるが、ネズミの糞は初めてのこと。

乾かない? 乾燥機

一九九四年七月、第一回世界都市害虫大会が、イギリスのケンブリッジ大学で開催された時のこと。大会前に立ち寄ったテンマークのホテルの朝食の席での会話。

同行のゴキブリ研究者「さすがに北欧のホテルは違う。部屋に乾燥機が設置してあったので、洗濯物を入れておいた」

研究者「残念ながら壊れているの

か、乾かなかったけど……」
 一同「どこにあったの?」
 研究者「洋服ダンスの中。気がつきませんでした? 扉に温度設定用のデジタル式のボタンがあった。設定が低かったのかなあ」
 A氏「えっ。それって金庫……」
 ちなみに同行者は、日本環境衛生センター・田中生男、JICA専門家・田原雄一郎、横浜市衛生研究所・金山彰宏の各先生とアペックスの木員でした。

便座変われば水圧変わる?

A氏は自宅トイレに「温水洗浄便座」を設置。その清潔感、爽快感に親しむにつれ、この型の便座がほとんど無い外出先では、余程の急場以外は我慢することになっていた。某日、アペックス社で便意に迫られトイレに……。アナタシ! 「温水洗浄便座」ではないか。早速用を足し、洗浄ボタンを押して数秒。突如、完腸されたのかと思えるほどの水圧に「ギャー」と叫んで飛び上がった。自宅の水圧に慣れていたA氏にとって、その勢いは爽快とは程遠い感覚だった。が、フツと思った。「社内この快感を楽しんでいる人がいるのかも」



おしやま虫

家ネズミ



【プロフィール】ネズミは古来、物語の世界では幸運を呼ぶ動物として崇められてきた。インドでは幸運の神「ガネーシア」の乗り物であり、日本でも大國主命の命を助け、大黒天の使い番として活躍している。しかし、現実の世界では、十四世紀ヨーロッパなどの、ペスト大流行のもととなった他、発疹熱、出血熱など、人類に悲惨な災いをもたらして来た。

【種類】日本では主として、住宅や商店にドブネズミ、農村と都市のビルにクマネズミ、港湾地帯にハツカネズミが繁殖している。

【駆除】ドブネズミは体が大きめ

虫めがね

☆さる九月、京都で日本ダニ学会の大会が開催された。日本のあらゆるダニの研究者が一堂に会し、ここへ来ればダニのことはすべて解決(?)するというユニークな大会。その懇親会での筑波大学の正野俊夫先生の話を紹介したい。

☆NHKの番組「生活ホットモーニング」に出演を依頼された時、害虫の殺虫剤に対する抵抗性がテーマというところで、前日の夜、打ち合わせのためスタジオ入りしたところ、ほぼ出来上がっていたシナリオは、殺虫剤はとにかく悪いという反農薬の立場で書かれていた。

立腹した先生は、並み居る若手デレクターと深夜まで激論を闘わせ、やっと殺虫剤を公平な立場で報道することを了承させた。

☆先生は、以前は国立予防衛生研究所に席を置かれていた日本の殺虫剤研究の第一人者。「現在、日本では、殺虫剤メーカー、厚生省、国民、マスコミの間に入って、公正に殺虫剤を判断する人がいなくなった」と嘆いておられた。

物事を正しく見るには、広い知識と正しい判断と勇気が必要だと改めて考えさせられた話だった。(頁)

で、比較的動きが鈍く、鈍感なところがあって、市販の殺虫剤を一〜二週間与えてやると駆除が出来る。クマネズミは運動神経が発達している、トラップでの捕獲は困難。警戒心も強く、殺虫剤もなかなか食べないし、四百四十一日も殺虫剤を食べ続けて死なないスーパーラットも出現している。

●食べ物を徹底的に無くす
 ●清掃と整理整頓を行なう
 ●巣になりそうな場所を与えない
 ●すき間を無くして建物への侵入と移動を阻止する

という日常の管理が重要。あとはネズミと知恵比べ、根気比べ!